

血液型ステレオタイプと対人認知¹⁾

丹 治 哲 雄²⁾

Blood Stereotype and Person Perception

TAJMI, Tetsuo

I. 緒言

筆者は前報で血液型と性格・行動特徴との間にある種の関連があるとするいわゆる『血液型人間学』³⁾ (例えば、能見, 1985など) に関する知識が、文教大学越谷キャンパスの学生たちの間にどの程度浸透し、どの程度支持され、どの程度話題になっているのかなどについて458名の学生および学生クラブ59団体を対象に調査を行った(丹治, 1992)。その結果、こうした『血液型人間学』が友人たちとの間で話題として登場した経験をもつ学生は85.8%の高率に及ぶこと、また、越谷キャンパスの学生クラブ59団体中の61.0%の団体が名簿にメンバーの血液型を記載していることなどが明らかになった。しかし、調査対象となった458名の学生たちの88.4%は『血液型人間学』を科学的に実証された正しいものとは考えておらず、68.8%の学生はそれを信じてはいないことなども同時に明らかになった。

ここでは、このような環境の中で「『血液型人間学』は科学的に正しくないと考えており、また、それを信じていない」学生たちの他者認知に血液型情報が影響を及ぼしていないかどうかについて分析を行ってみたので、その結果を報告する。

II. 実験方法

【1. 実験材料—質問紙の構成—】

質問票は10頁からなり、Ⅲ部から構成されている。Ⅰ部には(1)『血液型人間学』に関する知識や浸透の程度(1.「『血液型人間学』という考え方があるのをご存じですか?」; 2「友人などとの会話の中で(こうした)話題が出ることがありますか?」)、また、それを支持するかどうか(3.「科学的に実証された正しいものとお考えですか?」; 4.「信じてますか?」)などを質

1) 本報告は丹治が文教大学生生活科学研究所へ1993年度の研究テーマとして提出した『対人認知に関する研究—偏見を中心に—』の研究結果報告の一部であり、1993年12月17日に1993年度文教大学生生活科学研究所生活科学研究発表会で報告された。また、本研究は実質的には1992年度文教大学人間科学部開設科目『実験心理学』受講生30名との共同研究である。精力的にデータの収集にあたった30名の学生諸氏に謝意を表す。

2) 文教大学人間科学部心理学研究室

3) ここでは『血液型人間学』は現在のところ科学的に実証されていない俗説であるという意味を込めて『』付きで使用

問する4項目が設定され、Ⅱ部では(2)サー斯顿法を用いた『血液型人間学』に対する39項目の態度質問項目(丹治・落合・渡辺・秋山, 1991)が設定された。また、Ⅲ部は2種類に分かれ、(3)私立大学経済学部に通うある男子大学生の日常生活の様子と仲間からの評価などを紹介している短い人物紹介文(血液型がA型またはAB型と異なっている以外は全く同じ内容。本論文の添付資料参照)が載せられており、(4)この人物紹介文の内容に関する質問を7項目(例えば、「彼の通っている大学は私立大学でしたか? 国立大学でしたか?」や操作チェック項目(「彼の血液型は何型でしたか?」を含む)と、(5)この人物に対して抱いた印象を質問する12項目(7段階尺度)が設定された。この12項目は、事前の153名の学生を対象とした調査で得られた学内で流布している各血液型の性格・行動特徴についての俗説(例えば、「A型は真面目で几帳面で神経質」「AB型は二重・多重人格」など)の中から選択したものである。また最後に、(6)文章中の人物の印象を評定する際に、どのような点を参考にして評定したかを質問する8項目(7段階尺度)が設定された。なお、(4)(5)(6)への回答の際には、(3)の人物紹介文を再読しないで回答するように被験者に求めた。

【2. 被験者】

第1段階の被験者は、文教大学越谷キャンパスに在籍する男子学生206名女子学生252名計458名である。年齢、学部、学年などの被験者の属性の詳細については前報(丹治, 1992)で報告した。この458名のほぼ半数には血液型がA型の人物紹介文の載った質問票(以下A型ラベル群)を、また残り約半数にはAB型の血液型ラベルの人物紹介の載った質問票(以下AB型ラベル群)を、男女比がほぼ均等になるように割り当てた。

【3. 実験期間】

1992年7月9日から同年7月29日の間に主に1992年度文教大学人間学部開設科目『実験心理学(丹治担当)』の受講生が実験を行った。

【4. 分析対象被験者の選択】

質問票に回答した458名の学生の中から、まず、1)『血液型人間学』を全く知らないもの、2)こうした話題が友人たちとの会話に全く出ないと回答したものを除外した。次に、3)『血液型人間学』は科学的に正しいと考えているもの、4)『血液型人間学』を信じているものを除外した。さらに、5)質問票の人物紹介文を読んだ後、その人物の血液型に関する操作チェック項目に正しく回答しなかったものを除外した。その結果180名の学生が除外された。こうして残った男子学生135名(A型ラベル群69名:AB型ラベル群66名)女子学生143名(A型ラベル群70名:AB型73名)計278名データが今回の分析の対象になった。この278名の学生たちは、程度の違いはあれ『血液型人間学』の存在を知っており、友人との会話にもこうした話題が登場するものの、『人間型人間学』は科学的に正しいものではないと考えており、また、それを信じていない学生たち」ということができる。

【5. 結果の分析】

紹介人物の印象評定結果の分析には、まず人物紹介文の中の血液型ラベル要因(A型ラベルとAB型ラベルの2水準)と被験者の性別要因(男女の2水準)を変動因として2要因 2×2 水準の分散分析を行ってみた。その結果、どの場合も被験者の性別要因の主効果及び相互作用で5%以下の顕著な有意差が見られなかったため、本報告では、被験者の男女の結果をまとめて報告することにする。

Ⅲ. 実験結果

【1. 人物評定の際に参考にした項目】

人物評定の際にした項目について回答結果を表1に示す。両群の被験者とも文章中の大学生の印象を行う際には、彼のサークルでの態度・生活態度・サークルでの地位・勉学態度・ゼミでの態度・友人の評価・後輩の評価をある程度は参考にしたものの、その大学生の血液型はあまり参考にはしなかった（まったく参考にしなかったわけではない）と考えていたことがわかる。また、AB型ラベル群の方がA型ラベル群よりも、友人の評価や後輩の評価を参考にする程度がやや大きかったという結果が示された。

表1. 紹介人物の印象評定の際に参考にした項目の平均評定値・標準偏差と2群間のt検定結果

参考評定項目	A型ラベル群 (139名)		AB型ラベル群 (139名)		t値	有意確率
	平均標準 評定値	標準 偏差	平均標準 評定値	標準 偏差		
彼のサークルでの態度	5.49	1.16	5.47	1.27	0.136	ns
彼の生活態度	5.22	1.47	5.38	1.41	0.923	ns
彼のサークルでの地位	5.07	1.43	5.02	1.42	0.291	ns
彼の勉学態度	4.93	1.31	4.78	1.50	0.883	ns
彼のゼミでの態度	4.78	1.63	4.99	1.53	1.103	ns
彼に対する友人の評価	4.50	1.81	4.97	1.57	2.304	0.022
彼に対する後輩の評価	4.37	1.83	4.74	1.56	1.808	0.071
彼の血液型	2.39	1.77	2.43	1.62	0.196	ns

*表中の評定値は、1 = 「まったく参考にしなかった」、4 = 「どちらでもない」、7 = 「非常に参考にした」の7段階尺度値。

【2. 血液型ラベルと対人印象評定結果】

表2に、両群の文章中の大学生の印象評定結果を示す。幾つかの項目の印象評定値間で有意差

表2. 紹介人物の印象評定の平均評定値・標準偏差と2群間のt検定結果

評定項目(俗説: 回答%)	A型ラベル群 (139名)		AB型ラベル群 (139名)		t値	有意確率
	平均標準 評定値	標準 偏差	平均標準 評定値	標準 偏差		
几帳面(A: 47.1%)	5.59	1.28	5.10	1.49	2.929	0.004
真面目(A: 36.6%)	5.38	1.27	5.09	1.35	1.839	0.076
リーダーシップ(O: 5.2%)	5.22	1.34	5.46	1.34	1.490	ns
明るい(B: 24.2%)	5.05	1.37	5.35	1.28	1.883	0.061
神経質(A: 35.9%)	5.05	1.39	4.77	1.55	1.580	ns
慎重(特になし)	4.85	1.52	4.30	1.38	3.512	0.002
自分勝手(B: 25.4%)	4.33	1.28	4.49	1.46	0.970	ns
二重人格(AB: 46.4%)	4.19	1.47	4.37	1.46	1.022	ns
優しい(O: 5.2%)	4.04	1.16	4.19	1.17	1.071	ns
クールで冷静(AB: 11.8%)	3.97	1.44	3.84	1.24	0.805	ns
変わり者(AB: 27.5%)	3.73	1.41	3.97	1.29	1.478	ns
優柔不断(A: 9.2%)	3.13	1.43	3.23	1.29	0.611	ns

*各評定項目の(俗説: 回答%)とは、事前に153名の学生に文教大学内で流布している『血液型性格行動特徴俗説』を挙げてもらった調査結果である。%の母数は153名である。

*表中の評定値は、1 = 「まったく当てはまらない」、4 = 「どちらでもない」、7 = 「非常に当てはまる」の7段階尺度値。

あるいは有意差傾向が認められた。表2から、同じ内容の紹介人物を読んだにもかかわらず、A型ラベル群の被験者は、ABラベル群の被験者よりも、文章中の人物を「より几帳面で真面目で明るくなく慎重な人物」と評定する傾向があるという結果が示された。

IV. 論議

両群の被験者とも人物印象評定の際には、人物の血液型をあまり参考にせず、文章中の他の部分を参考にしたと回答していた。それにもかかわらず、印象評定の結果では、その差はわずかなものではあったが同じ内容の人物紹介文であってもA型ラベル人物はAB型ラベル人物に比べて、「より几帳面で真面目で明るくなく慎重な人物」という結果が示された。印象評定をする際に、AB型ラベル群の方がA型ラベル群にくらべて、文章中の友人や後輩の評定をより参考にしたという結果も見られたが、人物紹介文（添付資料）の内容を検討するかぎり、こうしたことが本結果に見られたような両群の印象評定の違いに圧倒的な影響を及ぼしたとは考えにくい。

印象評定に用いた12項目は、文教大学学生153人を対象とした事前の調査（「皆さんの間では、各血液型の性格・行動特徴としてどのようなことが言われていますか？」）で学生たちがあげてくれた血液型性格行動特徴に関する俗説の比較的上位にあがった項目を主に用いている。たとえば「A型は真面目で几帳面で神経質」、「AB型は多重・二重人格で変わり者」などの俗説である。印象評定で差の見られた項目は、越谷キャンパス内の学生たちの間で話題になる血液型性格行動特徴に関する俗説の中のA型特徴（真面目・几帳面）にある部分は沿ったものであった。事前調査でA型特性として、「暗い」をあげる学生が数%おり、「明るい」という項目で差（AB型のほうがより明るい）が見られたのかも知れない。また、事前の調査ではA型特性の中に「慎重」をあげる学生はいなかったが、この項目は「真面目・几帳面」と親和性のある項目とも考えられよう。

本結果は、『血液型人間学』は科学的に正しいものではないと認識し、また、それを信じていないと回答した学生たちですら、血液型情報の入った人物の印象評定を求められると、それとはあまり自覚しないまま、わずかではあっても『血液型人間学』の影響を受けて人物の印象を形成してしまうという事実を示している。『血液型人間学』の考え方は、表面的には否定されていても、学生たちの中はかなり根強く浸透していることをうかがわせる結果とも言えよう。他者に対するステレオタイプ的な考え方を一旦は否定しても、他者についてのさまざまな情報が与えられたとき、ステレオタイプ的な考え方を支持するような情報を選択的に用いて対人認知を行ってしまう、とすると仮説検証バイアス（hypothesis-confirming bias：Darley & Gross,1983）が、『血液型人間学』が浸透している環境で行われた本実験場面でも働いたのであろう。

V. 文献

- 1) Darly, J. M. & Gross, P. H. 1983 A hypothesis-confirming bias in labeling effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 20—33.
- 2) 能見正比古 1985 血液型と性格ハンドブック 青春出版社
- 3) 丹治哲雄・落合信仁・渡辺千歳・秋山胖 1991 『血液型性格学』に関する社会心理学的研究 (1)文教大学越谷キャンパス1年生の態度測定を中心に—文教大学生生活科学研究所1991年度生活科学研究発表会, 発表資料
- 4) 丹治哲雄 1992 『血液型性格学』に関する社会心理学的研究 (2)文教大学越谷キャンパスでの浸透の現状と使用され方について 文教大学生生活科学研究所1992年度生活科学研究発表会, 発表資料

VI. 添付資料

実験材料に用いた人物紹介文の一例。基本的には血液型の部分のみ異なる2種類を作成したが、さらに、A型特徴・AB型特徴（いずれも俗説）の文中の登場順序も半数は入れ替えて、登場順序効果を相殺して被験者に配布した。

彼は、ある私立大学経済学部の3年生で20才である。大学近くの学生アパートに住んでおり、そこから大学に通っている。生活費は、親からの仕送りと家庭教師のアルバイトでまかなっている。大学では文化会系のサークルに所属しており、そこの副部長を努めている。血液型はA型（あるいはAB型）である。友人たちと盛り場に飲みに行って羽目をはずして騒いだりするのは好きな方だが、最近、それも少し控えめにし、アルバイトに精を出している。お金をためてパソコンを購入しようと思っているからである。

大学のゼミ仲間やサークルの後輩たちの彼に対する評価はまちまちで、半数近くの人は、彼に対して、変わり者で、二重人格的な面をもつ人物だとの印象をもっているようである。

大学での勉強態度は真面目なほうだと思われている。ゼミでは彼の明るい面をかわれてリーダーシップを発揮して取りまとめ役をおおせつかることも多いが、案外自分勝手なところもみらる。サークルの運営にあたっては、神経質なほど几帳面に事を運ぶところがあり、サークルの大ざっぱな4年生の部長とよいコンビだと後輩たちからは思われている。